

透明な拘束から彩の介護インフラ構築へ

～身体拘束体験から介護の誇りを生み出すプロセス～

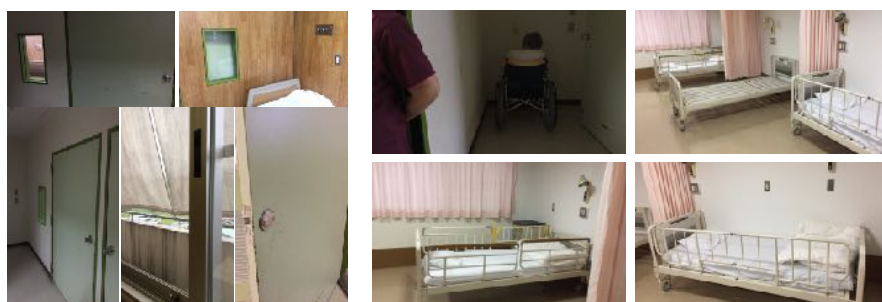
NPOまちあす代表理事/ヒトキタシャベル共同代表 軍司 大輔

極限の不自由|身体拘束をされたことは、ありますか？

身体拘束は「極限の不自由を提供する」こと

今を遡ること10数年前、仙台・川沿いの古びた病院の一角で、僕は縛られていました。ベッドの上で、俗に言う胴抑/手抑/足抑/ミトン/カギ付きツナギ……強化ガラスと鉄柵に覆われた狭い部屋で、独り吐き気や目眩と闘っていたんです。身動きの取れない身体は、動こうとするほど対象に囚われます。抵抗の無意味さを知るとともに、周囲への憎悪は肥大し、昨日までの友人が自分の命を奪いに来た敵のように見えてきます。縛られたままオムツに排泄し、金縛りにかかり続ける苦しさは想像を遥かに超えるものでした。身体拘束は「極限の不自由」を提供されること。それは緩やかに絞殺されているような、そんな気分でした。

人間の誇りを奪うには
小さな部屋がひとつと
少しの道具があれば十分
だということを、
体験は教えてくれます。
もちろん、具体的に。



なぜこの人は縛られているんですか？|何も起きないように縛る…？

人里離れた病院の閉鎖病棟で、全てを奪われる理由は。

久しぶりに全力疾走をした後のような、喉の奥がザラザラする荒っぽい呼吸に辟易しながら「あの人はこんなに苦しいのか」と先輩に言われるがまま縛っていた患者さんを思い出していました。「老人性うつ」で入院してからしばらく経ったある日、認知症と診断された82歳の女性です。自分が休みの日に身体拘束がスタート。出勤してすぐ病棟主任に「なぜ〇〇さんが縛られてるんですか？」と聞いたところ、不思議そうな表情で返ってきた回答はシンプルでした。「えっ？危ないから」「怪我されたらこっちの責任になるし▲▲先生の指示出てるし」。

ここにいる人たちの多くは、遅かれ早かれ何かしらの形で縛られ、看取られるその日まで抑制帯の中で暮らすことが宿命となっている、そんな環境でした。本当に全員が危ないのか？これを家族に説明できるのか？これは正しいのか？当時の若手数名でスタートしたのが「24時間身体拘束体験」です。

積極的に/文化的に/消極的に「拘束する」|葛藤する人しない人

目の前に積まれた黄金よりも、髪をかき上げるだけの自由と、人としての誇りを。

身体拘束を受けている時、顔にかかった前髪をかき上げることができる権利を売っていったらありったけの財産を手放していたかもしれません。しかし、呼吸も、寝返りも、「家に帰りたい」と思う意思すら奪われた時、わずかに残った誇りを消されまいと暴力性が自動的に表面化します。やがてそれも無駄と知った時、誇りはあっさり消え失せ、ただただ疲れ切った無抵抗な存在にならざるを得ないことを知りました。

ただ、現場の介護者が皆積極的に身体拘束をしたがっているわけでもありません。常に葛藤と闘いながら、消極的に対象者を縛り続けている人たちが多く存在しています。その介護者たちもまた、身体拘束をするたびに、自分たちの誇りを失っているように思えます。

怪我をすると責任を問われる……人材不足で十分なケアができない……だから縛らざるを得ない「消極的な拘束」が起きています。身体拘束が拘束者、被拘束者双方から誇りを奪っている現状がそこにはあります。



積極的拘束

文化的拘束

消極的拘束

文化としての身体拘束

フィジカルロック
ネグレクト
スピーチロック

事業所/地域として
公然と行われている
文化として定着した
身体拘束/虐待

文化的な拘束は
介護職の誇りも
喪失させている

文化的拘束＝低文明型拘束



学生：早々に就職決定



4月1日 無事に就職



4月2日 半泣きで電話

POINT

- ・地域でも老舗の病院系列介護老人保健施設
- ・日常的に身体拘束/ネグレクトが起きていた
- ・スタッフの中に「拘束/虐待をしている」という認識は皆無
- ・地域の評判「あの病院の系列だからいいところなはず」
- ・学習経験/就業経験のある職員が極端に少ない

拘束を拘束と認識している者が内外共ほとんどいない
文化として定着してしまった日常的で見えない虐待

拘束者が望まない拘束，拘束せざるを得ない就業環境．少なくとも数の介護者が自由/尊厳/自尊心を支えるはずの介護に誇りを持つことができません．事実，教え子の何名かがこういった理由で介護を離れていきました．介護人材不足は社会保障としての介護を破綻させ，そのまま社会の「介護離職」につながります，そして……

透明な拘束| 超高齢化と介護離職/介護人材不足

支援の手が途絶えた時、その人の主体性は拘束されている。

抑制帯による拘束やスピーチロックだけが身体拘束ではありません。「その人」に主体的な想いがあって、それを行動に移す時、他者の手助けが必要な場合に、支援の手が途絶えることは「その人」の主体性が拘束されていると言えます。目に見える物的な何かで縛られているわけではありませんが、結果的に主体的な生活が営めなくなる状態、これを私は**透明な拘束**と呼びます。

地域に広がる透明な拘束

介護離職防止。流行語のように繰り返されるこのワードを研修テーマとしていただくことも多くなりました。その傍らでは40代以上の企業にとって中核的な人材が介護離職し、介護に縛られている現実があります。その数、10万人。離職しないまでも、仕事と介護を両立させている人は全国に346万人（共に総務省,2017）。しかし、職業介護を行う介護人材は全国的に不足しています。介護人材不足が進むことで、社会保障としての介護を家族に返却することになります。透明な拘束は社会/経済の基盤である働き手を縛り、要介護者だけでなく、家族介護者の主体性をも縛ります。

介護人材不足は介護離職を生み、経済/社会の基盤を揺るがす。

透明な拘束からの解放に介護職の存在意義がある



介護人材不足は社会/地域にとっても脅威になります。その脅威とは何か？を考えることで、介護の意味が浮き彫りになってきて、誇りも見えてくるでしょう。

ただ人材が増えればいいというわけではありません。

過去、介護福祉士養成校に高い倍率が発生し、事業所にも人材が充足している時代がありました。しかし、人材が充足していた当時、狭義の身体拘束は今以上に蔓延していました。介護人材が不足することが＝身体拘束の理由とはなりません。

社会にとって介護とは何かを再定義し、介護を拡張させる時期がやってきました。



個別のケース
対応に特化
して緩やかに
進化した介護

介護を
拡張す
る



地域における
インフラとして
再定義された
これからの介護

地域の隅々まで必要な時必要なケアを提供できる

深化

インフラとしての介護

地域/訪問
介護職の
アップデート

×

既存/新興
地域力と
の協働

地域を拘束から解放する
誇りのまちづくり事例

点として高度化した

進化

多能職としての介護職

個性性/地域性を包括するマルチパッケージプレイヤー育成

訪問介護を中心とした地域コーディネート事例

良質な飲み水を張り巡らせるように、介護がインフラとして機能する健全な地域。

介護は社会全体が舞台となります。介護人材不足で支援の手が途絶えることは、そのまま地域力の低下を意味します。蛇口を捻れば良質な飲み水が流れ出すように、地域のあちこちでクオリティの高い介護が提供されることで、要介護者と暮らす家族介護者も拘束から解放され、社会全体の基盤が維持されます。地域への深化によって健全な社会を生み出すことは介護の誇りです。それは、結果的に誇りのまちづくりへと繋がります。

介護の誇りは健全社会にある|誇りのまちづくりにつながる介護

介護保険外サービスを地域に創出、フォーマルな介護との協働を生み出す。

介護人材不足はなんとかしたい問題ですが、人材不足は介護に限った話ではないですし、日本人全体が減っている中では「人が少ない状況」でも機能する形を考える必要があります。千葉県流山市で地域の方が高齢者の井戸端会議から生み出された「要介護状態でも着やすいオシャレな服」づくり（ヴァンダール）。

認知症の母との生活から「日頃の近所付き合いから要介護者も家族介護者もテクノロジーで支える」システムの構築（みつけくらぶ）。仙台市では「フリーアクセスファーム/畑作業と山の開拓」による共生と籠りの居場所づくり（ヒトキタシャベル）。同じく宮城で、「大学生と地域住民が福祉をつくる」（学生プロジェクトDIVE）をスタートさせています。

フォーマルが拾い上げられないニーズをインフォーマルが拾い上げる、そしてフォーマルに繋がる。介護がもっと地域を頼ってもいい、そんな協働共生の形が生まれ始めています。リアルな地域がクロスするフィールドワークは、地域のニーズを自然な形で浮かび上がらせ、良質で必要な水を必要な量届けるだけのインフラとしての介護を届けます。その流れの中で、介護がもっと専門性からはみ出した「多能職」として機能するための教育やモデルが必要です。それは教育としての進化です。そんな中から生まれる「健全な地域社会」にこそ、介護の誇りは生み出されます。



学生介護プロジェクト
DIVE

×



ヒトキタシャベル